
手乗り魔女と異世界からきた弟子

若桜モドキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

手乗り魔女と異世界からきた弟子

【Nコード】

N2542Y

【作者名】

若桜モドキ

【あらすじ】

僕のお師匠はとてもかわいい。

どうかかわいいかって言うと、食べれそうぐらいかわいい。

どういう意味かは想像に任せるけど。

妖精種だから手のひらサイズで、大きくなっても十歳ぐらいで、一人称が名前で、ワンピースの丈は短くて、表情がコロコロ変わるかわいい人だ。

そんなお師匠を愛でたりお世話するのが僕の役目。彼女がいれば、

違う世界でもまあ、何とか生きていける気がしている。

一応、帰る方法はあるらしいけど帰る気はない。ずっとお師匠と一緒にがいい。

これは念願の弟子がかわいくて仕方が無いサイズ小さめのお茶目な魔女と、そんなお師匠を愛玩するのが趣味な異世界出身のお弟子さんの、ごくごく普通の日常を適当に書いてみた何かである。

1 お師匠はかわいい

僕のお師匠の名前はセウだ。妖精種だから、とても小さい。蝶のような形の、少し透けて光っている羽を持っている。その羽がある時は、だいたい手のひらに収まるほどの大きさだ。

何でも、妖精種が持つ背中の中は、彼らの魔力の塊らしい。

だから優秀な魔法使いに妖精種が多いのは、生まれ持つ魔力の量が他と比べて桁違いだからということなのだという。まあ、姿を容易に変えられる種族なのだから、当然ともいえる。

羽がないと、少女と言われるぐらいの大きさだ。本当の姿というわけではないが、小さい方が身体に負担がからなくて楽なのだそう。妖精種はとても大変なんだ、とお師匠は言う。

確かにそよ風にさえ少し飛ばされかけているのを見ると、大変なのは理解できる。

とはいえ、魔法の実験をするときは、羽を消して大きい姿になる。さすがに強風に飛ばされるような小さい姿で、すり鉢で材料を砕いたり、大釜の中身を混ぜるとかはムリらしい。

そんなお師匠は、窓際が一番好きなポジションで読書中だ。

もちろん小さい姿で。

時々、その青い瞳を星のようにキラキラさせている。ちなみに、熱心に読んでいるのは魔法書じゃなく、恋愛小説らしい。わざわざ魔法で、小さい姿でも読めるように縮めている。

表情がコロコロ変わるお師匠は、見ていて何だかほほえましい。

全体的に、お師匠は白い。そして薄青い。

白いいのは服で、髪や瞳は薄く青い。

瞳の色は少し濃くて、肌はとっても色白だ。

手足はほっそりしていて、でも柔らかそうな感じがする。もちろん見た印象で、実際は分からない。触ったことがないし……握ったことはあるけど。突風に飛ばされかけてた時に。

お師匠はいつもひらひらしたワンピースを着ている。すぐくぺらぺらで、普段着というより寝巻きのような感じだけれど、この辺はあまり寒くないから、薄くても問題ない。

けれど、目に毒だ。

ワンピースの丈はとても短くて、太ももが半分以上露出している。少し風が吹くとめくれてしまいそうで、というかめくれるようで、お師匠は風が吹くといつも必死に抑えていた。

あまりに強いと、僕のところまで転がるように飛んできて、そのまま服の中に入る。ちよつと寒いときもそうやる。まるで猫のようだ。かわいい。撫で繰り返したくなる。

もちろん、そんなことをしたら、機嫌を損ねるのでないけれども、ちよつと脳内でやってみるだけなら。

「弟子くん、どしたの？　なんかにーやにやしてるよー？」
「いえ、何でもありません」

今日もお師匠はかわいい。

とりあえず、今日のおやつはお師匠が好きな焼き菓子にしよう。

きつと喜んで、笑ってくれるはずだ。

僕が好きなあの笑顔を、浮かべてくれるはずだ。

2・秘密の日記帳

特にやることも無いので、すっかり散らかった机を整理していたときだ。

「やあああ弟子くん、何みてたのー？ それなあにー？」

びゅーん、とお師匠が飛んできた。

そのまま機用に身をひねりつつ速度を落とし、僕の右肩にちょこんと座る。

彼女は、僕が作業の手を止めて読みふけていたものに興味津津のご様子だ。そういうところは子供のようでかわいいなあ、と思いつつ、口や顔に出さぬよう心の中に片付ける。

「別に、ただの日記……っばいものですよ」

「ふーん」

お師匠はあまりこういうのに興味はないらしい。

日々の実験などの記録は、それこそ重箱の隅に穴を開ける勢いで書くけれど、日記とか呼ばれるようなものは一切。普通は、こういうのは女の子ほどやりたがる気が、僕はするけど。

僕も元の世界ではそう興味はなかった。

ただ、なんとなく書き記したいから書いているだけ。この世界はいろいろと、元の世界と理屈が違っていることが多いから、そういうのを忘れないようにメモするためでもある。

それと、お師匠の前では『よくできた弟子』でありたいから、そういう地道な努力はあんまり見せたくなかったり。所詮、ただの『かつこつけ』というヤツだった。

「セラはね、そんなものを書かなくても平気なの。記憶力だけはば

「つちりーだもん」

ふふん、と自慢そうにいうお師匠。

実際にお師匠は、かなり優秀な魔女の一人だ。

時々、普通っていた魔法学校で、教鞭までとっているらしい。確かメルフェニカという王国だった……と思う。世界でも有数の、魔法を重用している国なんだと聞いた。

ちなみにここはメルフェニカに接する隣国……らしい。

師匠はあまり国というものに興味がないのか、メルフェニカ以外の国の名前はさっぱりわからない、と言っていた。加えて家主が歩かないこの家には地図もない。

そんなわけで僕は、自分が暮らす土地の名前も何も、実は知らなかったりするのだ。

「まあいいや。それよりも今日はねー」

くるんくるん、と僕のすぐ前を旋回する。

彼女の薄青い長髪が、目の前で美しい残像を残した。

「シフォンケーキを作ったんだよ！ セラのお手製のさー」

「……ああ、さっきから甘い香りしてましたね」

「お疲れの弟子くん、ぴったりだと思っただよ、セラは。それでね、せっかくだからおやつの時間にしようと思っただよ、セラは弟子くんを呼びにきたわけだったりするんだよね」

早くおいでー、と飛び去っていくお師匠。

僕はノートを机のすみにおいて、キッチンに向かった。

3・激甘党と甘い人

お師匠の家 アトリエは二階建てだ。

二階に僕とお師匠の自室と、書斎と物置がある。一回にはそれ以外の生活スペース、台所だとかリビングとか。それからいろんな実験などをするための部屋。それに使う道具の置き場。

庭は結構広くて畑もある。僕が勝手に作った、家庭菜園スペースだ。時々、普通の大きさになったお師匠が、キラキラした目で若葉を見ていることがある。

「早くおいしいのたべたいね、弟子くん」

そんな風に、にこにこ笑って。

それからご機嫌な様子で、畑の上をくーるくーる、と飛び回る。

「ねえねえ弟子くん、これとかそろそろ食べられるんじゃないかなあ」

指差すのは大きく広がる緑色の葉だ。

根菜類らしく、見た目はニンジン以外の何者でもない品種だっと思う。甘く煮付けたものを食べたことがあるけれど、味も大体同じような感じで、ほっこりとおいしかった。

この世界の食物は、見た目は元の世界とあんまり変わらない。お師匠が作ってくれるサラダにはレタスのような野菜が使われているし、柑橘系のドレッシングがあったりもする。

「セラはね、弟子くんのお料理が好きだよー。また何か作ってよーう」

「じゃあ……シチューにしますか」

小麦粉や牛乳、バターは存在しているから、できないことはない。一度、家庭科か何かの教科書の記憶を頼りに作ったけれど、それなりにおいしくできてお師匠は大喜びだった。あのもったりとした甘さが、好みにストライクだったらしい。

わあいわあい、とまるで子供のようにはしゃいでいる。

「木に引つかからないようにしてくださいね」

やっと開花したんですから、と僕は苦笑した。

お師匠が飛び回っている畑の一角には、柑橘系の果樹が植えてある。

見た目はオレンジ色のレモン……という感じだ。

切ってみると中身はともレモン。香りもだいたいレモン。この世界では柑橘類を料理などによく使うらしく、どこの家にも一本か二本は植えてあるとお師匠は言った。

すでに家の脇には品種の違う果樹が、十本ほど植わっている。季節ごとに花を咲かせ実を抱き、食卓に彩を添えてくれているようだ。

僕はとりあえず、手近なところにあるハーブを摘む。昼食に作るサラダにかける、ドレッシングの風味付けに使うためだ。それと、毎日欠かさないオヤツにも使う。

最近はクッキーが続いたから……今日はスコーンにでもしようか。まあ、僕がスコーンと勝手に呼んでいるだけで、実際はそれによく似た見た目と食感のお菓子なんだけれど。

ちょうどジャムを作ったばかりだから、それをつけて食べるのも悪くない。

「甘くしてねー、とっても甘いほうがいいよー」

「はいはい」

ご機嫌に庭の散歩を続けるお師匠に背を向け、僕は家に向かって歩き出す。

まったく、お師匠の甘い物好きも困ったものだ。

実験の合間にお菓子。

食後にもお菓子。

寝る前にもお菓子。

とにかくにもお菓子お菓子お菓子。

僕が元いた世界に連れて行ったら、大騒ぎするだろうな。

あっちに移住すると言い出すかもしれない。魔法なんてものが存在しないとしても、甘味物の前ではきつと些細な問題だ。移住しなくても、再現しろと言われるかもしれない。

……まったく、お師匠の甘党にも困ったものだ。

だけでもし、お師匠をつれてあの世界に戻れたら。

僕はきつとその手を引いて、ありとあらゆる甘味物を食べさせるんだと思う。

不恰好なお菓子にも、おいしいねえと笑ってくれるあの人のためなら、どんな出費も苦労も問題ではない。お師匠が笑ってくれたら、それだけで僕は満足。

相変わらず僕はあの人に甘いなあ、と苦笑した。

4・掃除の後はお茶会をしよう

「世界を操る魔法の指輪つてのに、興味はあるかい？」

ある日、お師匠はそんなことを言い出した。

ああ、いかにもゲームのアイテムみたいなのだなあ、と思ったのは秘密。

「むかーしだけどね、そういうのを研究してるのがいたらしいんだよ。どうやらこれに、ただの指輪にそういう魔法を宿す何か書かれていらいんだよね。マユツバだけど」

お師匠は、珍しくヒトの姿をしていた。そして、鈍器のような厚さの本を抱えている。あまりに重そうにしているので、僕はお師匠が本を落としてしまう前にさっと受け取った。

中に書かれている文字は見事なまでに、読めない。

一応、この世界の文字は大体読めるようになった……のだけど。

「あ、それふるーいふるーい魔法文字だから。さすがのセラも読めないの」

「じゃあ何でこんなのを……」

「セラが買ったんじゃないよう。セラの師匠の蔵書なのー」

書庫の整理中なんだよ、とお師匠は腰に手を当てて得意げに胸をそらせた。

普通、小さいヒトが大きくなる場合、グラマラス……とはいかないでも、女性なら年頃というか妙齢といって差し支えない感じになるのが、よくある『お約束』だと思う。

しかしお師匠は、どこからどうみてもツルンだ。

出るところは出ていない。へこむべきところはへこんでいる。とてもスレンダー。

誰がどう見てもこう思うだろう。

赤いランドセルがとっても似合いそうだね、と。

まあ、それがいいんだけど。かわいいし。

「僕も手伝いしようか？」

「いいよー、地下の書庫は危ないものー。弟子くんは……そうだ、お菓子作って」

「お菓子ですか？」

「うん。セラね、疲れちゃったから、もう少ししたらお茶したいの」
「……わかりました。でも、何かあったらすぐに僕を呼んでくださいよ」

「わかってるー。あのねあのね、セラ、今日はパンケーキがいいの」
「！」

「了解です」

楽しみだなー、とお師匠は地下の書庫とやらに戻ろうとして。

「ねえ、弟子くん。世界を操れたらどこに帰りたい？」

振り返って、そんなことを訊いてきた。少し、寂しそうに微笑んで。

僕はここではない違う世界からやってきた。それをお師匠が拾ってくれて、弟子としていろいろと教えてくれた。たぶん、その気になればもう一人で生きていけると思う。

お師匠は訊いた。どこに行きたいでもなく 帰りたい、と。

世界を操る力があれば、僕が元の世界に帰れるんじゃないかと……
…そう思っているのか。

ねえ、お師匠。

うぬぼれてもいいんでしょうか。

あなたが寂しそうにしているのは、僕と離れたくないと思ってい

るから。

仮に僕が帰りたいといっても、それを叶える知識を自分が持つていないから。

だから寂しそうなんだって、うぬぼれてもいいですか？

「僕が帰りたいのは、ここですよ」

指差すのは自分の足元だ。

「僕はここがいいんです。あなたのそばがいいんですよ、お師匠。元の世界に帰れる日が来ても僕はあなたのそばにいる。僕がいるべきは、あなたのそば以外には存在しない」

「……そっか」

「お菓子、たくさん用意しておきますからね」
今度は僕が背を向ける。

鼻をすする音が聞こえたのは、きっと気のせいだ。

5・開く、かもしれない

お師匠の家には地下がある。

人を殴り殺せそうなほど大きな錠前が、十個ほどついた扉の向こうに。

何が恐ろしいって、そこには鍵穴が存在しないんだ。穴がない、鈍器として運用可能な錠前だけが、十個ぐらいうずらりと並んでいる奇妙な扉だ。はつきり言って意味がわからない。

飾りかと思ってたいたら、向こう側へ音が響いていた。

扉の向こうが、空洞になっている証だ。

なぜ地下とわかるかというと、あの扉と錠前の意味を尋ねたことがあるから。

「あそこはね、セラの師匠のけんきゅーしつなの。それから書庫ね」

という、意外な言葉が返ってきた。

「あの人は昔、【古魔法】っていう魔法式を研究しててね。あの扉の向こうで、その実験をしたみたいなんだ。って言っても、そのころのセラは学校にいたから知らないんだけどね」

あはは、と笑うお師匠。

お師匠の師は、ここで研究に明け暮れていたそうだ。

そしてある日　ぽっくりと、なくなってしまったんだという。

彼　男性だったらしいその師の弟子はお師匠だけで、彼が遺したものはお師匠が相続することになった。

身内はいたかもしれないけれど、魔法使いでなければ使い道がないものも多かったという。

その中に、この家があった。

地下の、研究室があつた。

一人の魔法使い　魔法師が、理想を抱いて追い求めた研究が残る場所が。

「でもね、師匠が研究してた【古魔法】って理論が文献にもほとんど残ってなくてさ、不安定ですごく危ないんだよね。だから弟子くんも、不用意に地下に入っちゃ駄目だよ」

「はい」

「魔法のせいで空間とかねじれててさ……いや、多分意図的に捻ってるんだろうけど。ありえない広さだったりするんだよ。シロウトさんは迷うだろうし、そうなると一発アウトかもね」

と、少し怖いことを言ってから。

「魔法のお勉強が進んだら、案内してあげるね」

なんて、お師匠は笑った。

つまりお師匠は、あの部屋を使っているということなのか。

「そだよ。本当の本当に危険なじっけんとか書物は、みんなそこに収めてあるの」

「へえ……」

「いくら弟子くんがゆーしゅーでもね、セラは危険な薬品とかを弟子くんがうっかり触らないように気をつけているわけー。いい子でしょ？　セラはいいおししょーさんでしょ？」

「ええ、僕にはもつたいないくらいですよ」

小さな頭を指先でなでる。

お師匠はうれしそうに目を細めて、もっともっと、と僕に擦り寄った。

ああ、かわいい。

「弟子くんがもっともーっとすごい魔法使いになったらね、一緒に書庫で本を読もうね」

と、お師匠は笑っているけど、悲しいことに僕が誇れるのは知識の記憶力だけ。魔法の方は本当に初歩の初歩の初歩しか使えない。ひらがなの『し』とか『つ』だけ書ける感じだ。

普通、こういうシチュエーションの場合、何らかの要因で天才的な才能を授かってもいいとおもうんだけど、あいにくと話す言葉を理解するだけにとどまっている。

……当分開く気がしないとは、ご機嫌なお師匠には言えなかった。

6・かわいいドラゴン

森の中にまるーく切り開かれた場所があつて、その真ん中には家がある。

それがお師匠のアトリエだ。

たぶん、空から見たらものすごく目立つと思う。この周囲の森はかなり広範囲で、地元じゃ樹海とか言われてるらしい。その中にまっすぐ、古い街道が通っている。

お師匠のアトリエはその旧街道から、少し外れたところにあつた。

「こんちゃーっす。毎度おなじみ『魔女宅配』でーすっ」
元氣そのものといった声が聞こえ、続いて。

「はいはいはーい、今いくようー」
と、お師匠が答える声がする。

週に一度の恒例行事。

二階の廊下から下を覗くと、おさげの女の子が見える。この世界でよく使われる宅配サービスの最大手、その名の通りに魔女 女性や少女しかいない『魔女宅配』の社員だ。

確か年齢は僕より下だったはず。中学生ぐらい。

赤茶色の髪を、無造作に二つに分けて三つ編みにしている。何度か話をしたけど、師匠に負けず劣らずの明るい少女だ。僕より年下なのに、いくつか縁談もあるらしい。

とはいえ本人は仕事をしていたいらしく、片っ端から断っているそうだけでも。

「いつもいつもわるいねー」

「いえいえー。じゃ、頼まれてたブツはここにおいときますねー」
懐から先端に飾りのついた、いかにもな魔法のスティックを取り

出し、彼女は宙をかき混ぜるように何度かクルクルと回した。描かれる見えない円の中央に、光が集まっていく。

その光に『あそこに行け』というように、杖の先端を家の玄関のそばに向けた。

すると次の瞬間、そこに木箱や袋がドーンと出現する。

魔法で特殊な空間にしまっただけであるらしいのだけど、いつ見てもすさまじい。

「あ、預ける荷物はあれだよ」

お師匠は庭の隅に積み上げた荷物を指差す。昨日、僕が必死に運んだものだ。

中身はお師匠が調合した、魔法に使う触媒というやつ。お師匠は調合した触媒を売ることと生計を立てている魔女だ。僕がイメージするほど、魔法は簡単なものじゃないみたいだ。

まず魔法には触媒というのがいるし、触媒には魔素と言うものが必要になる。魔素はそこら辺でも普通に売られているらしいのだけれど、触媒は基本的に自分で手に入れるしかない。

そこらの石とかも、魔素さえあれば触媒になるそうだし。ただと更なる効果を求めるなら、それ専用に調合しないといけない。

石を砕いて混ぜ合わせたり、草をすりつぶして混ぜ合わせたり。それを魔法には影響がないノリのようなもので固めて、丸く団子状にする。……で、それを箱詰めして出荷するんだ。

調合にはレシピがある。

さながら名店のソースやスープのように、門外不出の貴重品だ。簡単な調合レシピなら市販されている書物に載っているそうで、一流はそれを自分専用に改良するのだという。

お師匠が作っているのは、一般向けの適度に力を押さえ込んだ触媒だ。

要するに、全部買ってきて済ませてしまっ、本職の魔法使いじゃない人用。ランプとかキッチン用品などで結構使われているらしい。乾電池みたいなものだろうか。

ちなみに『魔女宅配』は元が商家で、出荷したブツはその場でお金に変えてもらえる。

「さすがセラさんですねー、これならちょっと割り増しサービスです」

「わーい」

と、いつもより多めにお金をもらっていた。

お師匠が作る触媒は、質がいいので評判なのだという。

「では、またのご利用をー！」

彼女はひらりと軽やかに ドラゴンにまたがった。ホウキじゃない。あれは間違ってもホウキと読んでいいものじゃない。お師匠もかわいいドラゴンだねー、とか笑ってるし。

というか、かわいいのだろうか。今にも炎を吹きそうなのが。確かに飼い主になでられてネコのようにゴロゴロ喉を鳴らしているのは見たけど、一軒家サイズをかわいいとはとても。

この世界の魔法は、やっぱりなんかおかしい。

7・ひよこ

孵ってしまった。

ひよこが。

食用の卵が　　じゃない。

お師匠が、誰かから預かったタマゴが孵ってしまった。まあ、窓際の日当たりのいいところにおいてあったら、孵りもすると思う。問題は、それが何のヒナなのかわからないことだ。

見た目はひよこだ。
ふわふわだ。

「弟子くん弟子くん弟子くん！　ふわふわだよ！　もふもふだよ！」

と、お師匠のテンションが振り切れるくらいには。確かに一匹、かごから逃亡を図ったのをとっ捕まえたけれど、ずっとにぎにぎしていたいぐらいに、ふわふわのもふもふだった。

手のひらだけでこんなに気持ちいのだから、さっきから十羽ほどの黄色い塊の中に埋もれているお師匠なんてまさに天国だろう。ちよつとうらやましい。

ああ、でもつつかれるのはノーサンキュー。

とりあえず僕はお師匠を、毛玉の中からつまみ出して。

「それでお師匠、いつまで預かるんですか？」

「そのうち引取りに来ると思うよー」

それまでムフフー、と再び黄色の毛玉に突撃するお師匠。
楽しそうだ。

まあ、見た目はただのひよこだし。後にどんな身の丈に育つか知

らないし、多分知らない方がいいような気がするけれど、とりあえず今は安全で人畜無害のようだからほっとこう。

僕はお師匠の笑い声を聞きながら、台所へと向かう。

飼い主が残っていたメモには、万が一にも孵化してしまった場合も書かれていた。要するにエサなどの世話の仕方だ。幸いにも、エサはそう面倒なものではないらしい。

基本的にはレタスとかキャベツみたいな、あの手の野菜を与えればよいようだ。朝食に使った残りがあるので、それを細かく手でちぎってお皿に持った。乾燥ハーブも忘れない。

そういえば、食用の家畜にハーブなどを入れたエサを食べさせて風味をつける、なんてテクニックがあるらしいのだけれど、これもその一環なのだろうか。

中途半端に似通った世界に、僕は時々戸惑う。食べ物の 見た目こそ微妙に違ったりしているのだけれど、名前は同じだし。まるでそれはそういう名前と決められているようだ。

誰が決めるんだよ、と心の中でつつこんで、僕はエサを手に取りリビングに戻る。

「ふあふあだよ……はふう」

そこには、昇天しかかっているお師匠がいた。

しばらくして毛玉たちは、元の飼い主に引き取られていった。

その後、食用のタマゴに抱きついて暖めようとしていたお師匠に対し、僕はそのタマゴでおいしい目玉焼きを作ってあげたりしたけれど、それは別に語るまでもない話だ。

8・世界のレシピ

ずっと気になっていたことがある。

それは、二つの世界　僕が元いた世界と今いる世界の、奇妙な共通点だ。

わかりやすいところで言うなら、食べ物と呼称。

実はほとんどいうのも無意味なほどに、変わらない。

オレンジみたいなレモン、なんてものはあるけれど、基本的に僕から見たレモンはお師匠から見てもレモン。チーズやバターもあるし、牛乳も飲まれている。

一度、差し入れされた都のスイーツなんて、元の世界のソレと何が違うのかわからないくらいに生クリームだった。おいしかったし、味も僕が知る生クリームと変わらない。

食べ物だけじゃなくて、たとえば時間の数え方や距離の単位も同じだ。

さすがに暦はちょっと変わってたけれど、でも『月』のような区切りがあつて、ひと月三十日になっていたりする。生活はしやすいのだけれど、偶然も積み重なると薄気味悪い。

まったく理からして異なる二つの世界。

それなのにどうして、こんなにも共通する部分が多いのだろうか。

……という話をしたら、お師匠は妙に興味を示してくれた。

『セラの知り合いにね、世界について研究している変わり者がいるんだよ。パメラ・シエルシュタインと言ってね、かの一門にその魔女ありと言われる不老の魔女さ』

お師匠の知り合いでもあるそのパメラという魔女の仮説の中に、僕の話と互いに参考にし合えそうなものがあるという。むしろ、僕

の証言が仮説を裏付ける可能性もあるそうだ。

その仮説とは 世界にはあらかじめ用意された素材がある、ということ。

それを神様と呼ばれる何者かが、その時々気分や目的で組み合わせているんな世界を作り上げているのではないか、という……まあ、かなりぶつとんだ仮説だった。

だけでもしそうな僕の話に、それらしい説得力ができる。

レモンはああいう形で、味ということが、あらかじめ素材の中に入っていたなら。

「……面白い話だけど、証明しようがないしな」

僕以外の、僕とは違う世界からの来訪者でもいなければ。

とはいえゲームとか小説でもないのだから、そんな都合よくポンポンと飛んでくるわけがないのだから。結局、仮説は仮説のまま……ということになるんだろう。

僕だってどうしてこうなっているのか、いまだによくわかっていないのだから。

ただ恐ろしいほど古い古い魔法には、世界を世界を渡り歩くなんて記述が残るものもあつたりするという話だし、そういうのを使えば帰れる……かもしれないね、なんて感じで。

しかし方法の手がかりはあるけれど、肝心の魔法式はさっぱりわからず。

お師匠曰く、【召喚式】というヤツの応用じゃないか、とのことだけれど何をどうすればいいのかというレシピは、いまだ見つかってない。そんな魔法があつたという記述だけだ。

……まあ、一番の問題は、アレだ。
僕に帰る気がないことなんだろっけねど。

9・起きたらそばに

ひどい夢を見た。

誰か知らないけれど、かなり体格のいい誰かに、のしかかられる夢だ。ひどいにもほどがあるというか、苦しいので勘弁してくださいと言いたくなる夢だ。

こういう場合、身体の上に何かが乗っているという。

……本だろうか。

いや、確実に本だろうな。

寝る前に読んでいた。魔法のあれこれ書いてある本だ。僕はまだまだ見習い以下で、読んでいる本は本来ならずと小さい年頃の子が見るような内容らしい、けれどもかなりぶ厚い。

魔法に関してはまるつきり未経験ゾーンで、知らないことが多すぎる。だから寝る間は惜しまないけれど、できる限り知識をためようと僕なりに努力しているのだけれど。

重い。

こう……ずっしりとした重みがある。さっさと目を開けて起きてしまえばいいものを、二度寝したくなってしまうた僕は、そんな当たり前の選択肢を蹴り飛ばした。

変わりに、重さを撤去するために腕を動かす。

ここでも目を開ければいいのに、睡魔が飛んでいきそうで開かない。

さらり、としたものに触れた。

……糸だろうか。

それにしては束のようにたくさんあるし、長いし、つやつやして

そんな感触だ。びつくりするほど指通りがいい。シルクの表面のよ
うな感じがするから、絹糸もこんな感じだろうか。
さすがに本ではないことを理解し、僕は渋々まぶたを上げる。
薄青いそれが、僕の胸の上にあることを知った。

「……」

なんで、いるんだ？

一瞬で目が覚めてしまった。

むしろ覚めすぎて、軽く頭痛さえする。

「……お師匠？」

そこには、ヒトの姿のお師匠がいた。十歳くらいの少女だ。羽は
ない。彼女ら妖精種の羽と言うものは魔力的な何かの塊らしく、そ
れを消すと十倍以上に身体を大きくできるという。

なお、羽は元の大きさに戻れば自動的に復活する。

違う、そうじゃない。

なんでお師匠が僕の部屋にいるんだ。僕の上で寝ているんだ。お
師匠は確かに夜遅くまでいろいろ作業をしていたし、だいぶお疲れ
のようだったけれども寝ぼけたことはなかった。

いや、何度かあった気がするけれど、部屋を間違えた上にこんな
こんな……。

とりあえず僕は、静かに静かにお師匠の身体を横にずらした。

同時に、僕の身体を逆の方向にずらした。

お師匠はまさか僕の上で眠っているなんて思ってもいない、穏や
かな寝顔を浮かべ静かな寝息を立てている。この上ない熟睡モード
だ。静かにすれば、起きないはずだ。

そっとお師匠の下から脱出し、僕が寝ていた位置に寝かしなす。

よし、これでミッションコンプリートだ。

さあ一階にいこう。朝ごはんを作るというセカンドミッションを。

「……弟子くん？」

背を向けて扉に手を伸ばした僕の背に、お師匠の声が突き刺さる。寝起きなのか、どこか舌足らずな感じの声だった。

ふりかえると　お師匠は寝ていた。寝言、のようだ。もう食べられない、というベタな寝言は聞こえなかったが、お師匠が完全に熟睡しているのはわかった。

僕は廊下へとすべるように脱出、一階のキッチンに直行。

吐き出せなかった息を、そこでようやく吐き出した。

お師匠は朝ごはんの準備が終わるころ、小さいいつもの姿でやってきた。

「なんかねー、弟子くんのトコで寝てたよー」

「気づいたら進入されてました」

「うー、ごめんねー。セラ、疲れてると寝相とか悪いらしいんだよねー」

たまに外に落ちてることがあるんだよね、と欠伸と共に語られる内容は、スープを作る手元が少し滑りそうになるものだった。……

落ちてたって、それって飛んでたってことですよね。

「でもこれからはきつと、弟子くんに引き寄せられて弟子くんのトコにいくから、とっても安心だよねー。あのねあのね、弟子くんのトコで寝ると、すっごくいい夢を見るんだよー」

うふ、と意味深な、けれど意味を知りたくない笑みを浮かべるお師匠。

僕は決意した。

お師匠を極度の疲労にさらさない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2542y/>

手乗り魔女と異世界からきた弟子

2011年11月8日07時05分発行